

研究ノート

絵本の中の図書館リテラシーとマナー

—絵本に描かれる図書館2—

Library Literacy and Manner on Picture Books
Libraries on Picture Books 2

村主千賀*

Chika MURANUSHI

キーワード：図書館リテラシー 絵本 図書館利用 マナー

Key Words : library literacy, picture book, library use, library manner

要約

図書館が描かれた絵本を通じて、子どもたちはお話の世界を楽しみながら、図書館を知り、図書館リテラシーやマナーを知ることができる。本研究は絵本に描かれる図書館に着目し、どのような表現の中で、図書館リテラシーやマナーに関して、どのようなポイントが強調されているのかを明らかにした。

Abstract

Through picture books about libraries, children can learn what libraries are, how to use them, and how to behave there, while enjoying the world of stories. This study focuses on the depiction of libraries in picture books, and clarifies what kinds of points are highlighted about library literacy and manners, along with techniques used to do so.

1 はじめに：作品の中の図書館の機能

様々な映像作品(ドラマ、映画など)や絵本や小説などの文芸作品の中で図書館が描かれることがある。それらは、作品が描かれた国や文化を背景として、その社会での図書館のあり方、位置づけ、人々の図書館や図書館員への意識を映し出すものと考えられる。作品の中で描かれる図書館と図書館員に関する多くの研究が存在することを前著で指摘した(村主 2016)。

作品の中で図書館は様々な描かれ方をする。それは「場所」であり、読書の、また時々はお会

* 東海学園大学人文学部人文学科

いのアイテムとなる「資料提供」を行い、「問題解決の場」として描かれる。例えば、単に話の舞台として描くもので、「場」としての役割以外に機能を何ら発揮しない図書館がある。一例をあげると韓国映画『클래식(邦題：ラブストーリー)』(郭在容監督 2003年)では、図書館は数人が集まれる広いデスクが置いてあり、ラブレターの代筆をする場所ではない。

日本映画『ラブレター』(岩井俊二監督 1995年)では、図書委員、図書館司書が主人公であり、図書館は出会いの装置として重要な場所である。しかしそこは読書のための場所そして「貸出」をする場所としてのみ描かれる。さらに『耳をすませば』(近藤義文監督 1995年)でも同じく「読書」「貸出」という二点で図書館が描かれる。尚、この2つの作品はどちらも図書館利用者のプライバシーという点を軽んじているということで、図書館界では物議をかました。図書館側が意識するほど、注意深くは図書館のことを描いてはいないと言える。作品の中で図書館は読書機会の提供という一面からとらえられることが多い。

貸出以外の例としては、課題解決の場所として描かれるものがある。代表的な作品としてしばしば言及されるのは『ロレンツォのオイル』(ジョージミラー監督 1992年)である(野添 1992)。本作品では、不治の病の我が子を救うため、医学者ではない父親が図書館で文献を調べつくす姿が描かれている。一市民がNIH(National Institutes of Health)の図書館を利用するということ、*Index Medicus*を利用して文献検索する、*Cumulated Index Medicus*をマイクロ資料で使うシーンにおいて、図書館の情報機能が発揮されることが注目できる。実話をもとにした本作において、市民が課題解決の情報源として図書館を選択する、そこでは図書館がどういうところなのか、何ができるところなのかということがはっきりと描き出されている。舞台となっている米国の中で培われた図書館自身が持つ社会的機能と能力と、市民の図書館リテラシーの高さがうかがえる。

図書館リテラシーとは「図書館(図書館を介して利用できる資料や情報)を利用する知識や技能」のことで、情報リテラシーの重要な一部として認識されている(野末 2006)。「困ったときには図書館へ」という図式は、身近に図書館があり、図書館を利用することが生活の一部になっている人にとっては当たり前のことであり、欧米では絵本の中でも子どもたちが図書館を上手に使いこなす場面が描かれていると、草谷は指摘している。(草谷 2013)。

2 絵本と図書館

本研究では、図書館を描く作品群の中から絵本を取り上げる。絵本は図書館の利用対象別サービスから見ると、児童サービスで提供される資料である。児童サービスの対象は子どもを対象としているが、年齢で限定することなく、一般的には乳幼児から小学生、あるいは義務教育年齢までである(2010 小田)。絵本はブックスタートのアイテムとして取り上げられることからわかるように、本への親しみを育むことを期待されるメディアとして、読書習慣の形成にとって重要な位置づけを与えられている。絵本が、前述した作品はじめ多くの図書館を描いた作品と異な

るのは、子どもの成長段階において、比較的早い段階で出会うメディアということである。

草谷は絵本を“楽しみながら図書館を紹介する”意図をもって、多様な絵本を紹介している。それは草谷自身の経験に基づき、図書館が「知の宝庫」であり、図書館が地域文化や人生を支え得るという確信をもって、“図書館は本が人々とどうかかわり、地域の発展や個人の生き方にどう影響しているのか”を伝えようとする読書案内である。読書習慣を身につけるとともに、読書の中で図書館を知ることが意図している。

それでは、絵本によって、具体的には図書館の何が伝えられるのか？どのように伝え得るのだろうか。筆者は以前、絵本における図書館の描かれ方を、図書館の構成要素別、伝えられることがらからの区分を行った(村主 2016)。図書館がファンタジーやフィクションの舞台となることで図書館への親しみを育むものがある一方、意図的に図書館利用マナーや図書館リテラシーを伝えようと描かれるものもある。そこで本研究では、絵本によって図書館の機能をどのように表し、どのように伝えられるのかに着目し、図書館利用マナーや図書館リテラシーを伝達するメディアとしての可能性を探っていく。

3 絵本に描かれる図書館リテラシーとマナー

3.1 図書館リテラシー・マナーを描く絵本のタイプ

前著(村主 2016)で示した図書館をとらえる枠組みの中で、図書館リテラシーや図書館マナーがお話として語られる場合のあることを指摘した。本研究では、そのような絵本を対象にして、図書館リテラシー・マナーの表現のされ方の具体的な描写を見ていく。

図書館利用の場面が取り上げられるパターンは以下の(A)から(D)にあげる通りである。学校図書館や児童・生徒の図書館利用教育について描かれたものは多数あるが、今回は、「お話を通じてより早い時期に図書館になじむ」という点に着目する意図から、下記(C)(D)に該当するもの(付表1の90-111)については詳細な分析の対象としない。(C)(D)は、「読む」よりは「学習する」ためのものであり、教材的な要素が強い。(C)は図書館の歴史、図書館の機能などの知識を伝えている。(D)は図書館利用のためのスキルや知識を伝えるためのワークブックで、クイズや課題が設定され、空欄を埋めていく形式などを取っている。

- A) 図書館が出てくるお話の図書館利用時のリテラシー・マナー
- B) 意図的にお話で伝える図書館リテラシー・マナー
- C) メディアとして絵本の体裁をもった便覧やガイドブック
- D) メディアとして絵本の形式をとった図書館リテラシーのワークブック、ドリル

図書館リテラシーやの利用マナーがお話で言及される場合、それを伝えることを意図的に描いたものと、そうでないものがある。意図しない、もしくは意図が明確でないものとは、巻頭言、

巻末言、著者の言葉に言及がない、プロフィールに図書館との関わりを確認できない、図書館に関するシリーズものに属さないものである。図書館リテラシーの伝達意図をもって描かれたのが明確でなくとも、お話の文脈に埋め込まれた図書館利用シーンで図書館リテラシーやマナーが読み取れることがある。図書館が舞台となっているため文脈上登場人物の自然な振る舞いのなかで図書館を利用し、結果として図書館リテラシーを描いたもののことである。また図書館利用がお話の軸ではないが、主人公が日常の生活を送る上で図書館を利用するというものがある。

前述の(A)に(1)図書館を舞台にしたお話、(2)図書館を舞台にしているわけではないが、主人公の生活上のエピソードとして「課題解決の場所」として選択される図書館がある。意図して描かれた(B)のグループには(3)図書館利用をレクチャーすることを意図したお話の他に、(4)絵本を楽しむものであるが、ストーリー自体に山場や起承転結、オチのようなものがあるのではないが、詩や言葉遊びになっているものがある。

様々なパターンの図書館利用の描写について、次節では図書館リテラシーや図書館マナーに関する箇所を考察していく。なお文中[数]は付表1の絵本リスト番号である。

3.2 絵本で伝える図書館リテラシー

3.2.1 図書館には何があるのか

登場人物が図書館へ訪れるといろいろな資料を発見していく。資料のジャンルが示されたり実在するお話のタイトルや登場人物が盛り込まれていたりする。

恐竜ばかりの図書館を探索するお話では、人間の女の子の主人公が、アンモナイトやシーラカンスなどの古代の生き物について「図鑑で知っている」と言う[71]。図鑑は事物事象の探索における代表的なツールで、形状や構造の特徴をつかむ視覚情報に訴えるレファレンスブックである。

また、司書が図書館にあるすべてのものを「どんどん噛んで飲み込んでしまう」という描写があった[12]。それによれば本だけで図書館が成り立っているわけではないことがわかる。そして、最後に「噛んで飲み込んでしまったこと」とはなんだったの？という子どもの問いの答えをたった1語“read”と吐き出す。図書館は多様な構成要素で成り立っていること、噛み砕いて飲み込むとはすなわち「読む」ことであると理解できる。

『図書館だいすき』[57]はファンタジーであるが、図書館にはあらゆる分野の本(算数、科学、歴史、天文、理科、音楽 etc.)があること、それらは図書館ではグループ分けされていることが描写される。さらに、百科事典は“この世のことならなから何まで教えてくれる”と紹介している。

3.2.2 資料の探し方とシステムの使い方

Goldie Socks and the Tree Librarians [9]では、女の子が森で見つけた本でできた小屋の図書館に忍び込み、たくさんの本を目の当たりにする。どれを読もうか？あまりにも多い。彼女は自

分びつたりの本をどのように見つけたのか？彼女がその中から自分が読める本を探すコツとして、five-finger-ruleを紹介している。彼女は読み始めから一つ読めない語があるたびに指を一つ折っていく、そして5本の指を折ることになったら、その本は自分にとって難しすぎるということなのである。これは子どもが、自分の力でレベルのあった本を探す具体的な方法を伝えている。

『ビバリー図書館へ行く』[74]では、科学の本(白亜紀の恐竜の本)を利用して主人公ビバリーは大昔の世界の模型をつくる。その本の次の利用者に「どんなことを調べているの？恐竜の本をさがしていたの？」と聞く。科学の本は調べ物に役立つこと、本を利用してただ知るのではなく、同じ興味を持つ仲間を見つけるとともに探索を深めていく楽しさが見て取れる。クラスメイトと共同して調べ学習をすることを描いたお話では、男の子と女の子の図書館員や資料へのアクセスの姿勢が対比される[27]。女の子はことごとく“*Our librarian won't tell us anything*”というが、男の子は図書館員と会話し探索方法を習得していく。これは、女の子のレファレンス質問が「事実そのものの答えを求めるもの」に対して、男の子は「探し方」を訪ねているために差が生まれていることを示している。男の子に対して、図書館員はまず、動物の書架へ行き読み切れないほどの量の本があること示す。大量の資料の中から最適なものを探すにはコンピュータ目録の利用を促し、検索結果をブラウズし資料選択をする。目録情報と書架の関係は請求記号で表されているという説明から、請求記号の記録をもとに書架で本を見つける。図書館資料の探索方法の基本を、どのステップも図書館員はごく簡単に男の子に話しレクチャーするのみである。「図書館員は何も教えない。助けるだけ」と男の子のセリフが、レファレンスサービスのあり方を端的に示している。

3.2.3 課題解決の場としての図書館：図書館員や図書館サービスを使いこなす

図書館のお話としてではなく、主人公の生活の日常の文脈の中に埋め込まれた図書館利用が描かれるものがある。実話も含めて、主人公は自らの課題解決の場、情報源として図書館を選択する。

『はちうえはぼくにまかせて』[73]では、夏休みのアルバイトとして近所の人たちから鉢植えを預かり、植物の成長がコントロールできなくなった時、少年は自ら図書館に出向き植物の世話をする本を探し出す。見事に世話をしたことで、町中の人に喜ばれる。さらに挿し木で増やす知識を得たことで、剪定して切った枝をつかって苗木を育て、小さな子たちに分けてやる。知識や情報を上手に使う例である。『あこがれの宇宙飛行士』[37]ではセサミストリートのエルモとともにTV中継を見て抱いた疑問を図書館で解決する。最初はお母さんに尋ねてみる。その次に満足する情報を得るまで図書館で調べていく。身近な情報源(家族、友人)から始めて、より多くの情報を得るための選択肢として図書館を利用するというのは、一般的な情報探索行動と一致す

る。実話の『風をつかまえたウィリアム』[44]では、貧しく学校へ行けなくなった少年が、図書館で調べて人々のために自家発電を完成する。『図書館へいくピープちゃん』[67]は、羊飼いのピープちゃんが迷子の羊を探すために、「羊の探し方の本」を探しに図書館へ行くお話である。初めに本を読むブルー君に「その本、ひつじのさがしかた？」と聞くことから、課題解決のヒントを本に求めていることがわかる。そしてブルーくんは「さがしものは図書館へ行くべき」であると返事する。*Never Let a Ghost Borrow Your Library Book* [25]では本文ではないが、絵の中で“option?” “optionの意味がわからなかったらレファレンスライブラリアンに聞こう”という会話が描かれている。他にはレファレンスカウンターで「蛇のことを教えて」など質問が寄せられる場面で、少年はレファレンスカウンターを利用している[32]。また、図書館に住むねずみのサムの活躍を描いたお話ではしばしば「本で調べよう」と彼らの図書館活用術が描かれる[61][63][65]。

これらのお話からは、「わからないことがあったら」「困ったら」図書館に行くという発想と行動が、自然なふるまいとして出てきていることがわかる。それは、読書の場としてだけでなく、図書館が課題解決の場として生活に定着した社会背景があってこそその描写である。

特別な図書館サービスの利用による課題解決を描くものもあった。犬とのふれあいの機会を提供する図書館のプログラムを利用して、学校で人前で声をだして本を読むことができない少女が、犬に対して読み聞かせることで、本を読めるようになるお話である。実際に図書館では多様なプログラムが準備されている。本作がフィクションであったとしても、情報を得ること以外にも図書館が様々な機会を与えてくれる場所であることが示されていることは注目すべきである。

3.2.4 情報検索・文献探索のスキル

前著でも指摘したが、図書館のシステムの中の特定の事柄について解説するものがある。本の探し方という文脈のなかで、本は主題ごとに分類されており、それが10進数の記号を使って表されているのだという Dewey Decimal Classification (以下 DDC) にだけ注目するものがある。DDCの第一区分(一番大きな主題分野)の解説と、2桁目以降は例示にとどめ詳細な説明をしないが、分類法、請求記号の構成と見方、書架の棚との関連を解説している[2][5]。

検索技術としては、本の探し方の基礎と主題検索における絞り込みと拡張について、レファレンスカウンターでのやり取りの描写で伝えるものがある。一人の少年の成長に沿って、1年生の時は、2年生の時は、と学年を追いながら、その時に図書館員と交わした会話、面白いやりとりが描写される[32]。実はこのやり取りに検索の秘訣と、図書館の資料組織の仕組みが示唆されている。例えば捕まえた虫をそのまま持ち込んで、「何の虫？」と聞けばあつという間に図書館員は検索してみせる。なぜ、そのように早く調べられるかという問いに、「目録があるから」と説明する。迅速に資料を検索するにはあらかじめ書誌情報と主題分類からの組織化が必須である。その表れ

が目録なのである。「私たちはあらかじめ目録をとっているから、すぐ調べられるのよ」という答えによって、図書館の資料はすべて目録検索によって探せることが知らされる。「蛇の本を探したいの」という問いには「一人で育てるの?」と聞き返す図書館員の傍で「蛇のアクセサリーの作り方の本があるよ」「蛇の詩があるよ」と答える図書館員がいる。「蛇の本」ではあまりに抽象的であり、より具体的に「蛇の何について」調べるのかという主題の絞り込みを、レファレンスインタビューを通じて描いている。ちなみに、このやり取りを「レファレンスインタビューである」と説明を必要とするのは図書館司書課程の学生だけである。絵本を読む子どもには、「そうか、蛇のどんなことを知りたいか」を言わないと本は探せないんだな」と伝われば良い。

検索された本は常に請求記号と書架の関係を説明され「情報入手」によって行動が完結される。請求記号に言及するとき、アメリカが舞台であれば必ずといってよいほどDDCに触れている。請求記号を構成する第一の要素は主題分類であり、本は書架分類として主題のグループにより配列されている。請求記号は一見、棚における住所の番地のように見えるがその数字には意味があるのである。初めから分類記号によって本を探すのは難しいが、知っている言葉（キーワード）から本を探して、書架に行けばDDCの同じグループの本があるという理解に結びつくようにお話も絵も伝えている。加えて、DDCの中で、テーマから分類されていない領域のあることもしばしば触れられている。それは、フィクションとノンフィクションという見方をしたとき、ノンフィクションだけが適応されると説明される。図書館にある資料はまず、フィクションとノンフィクションがあることから始まり、それぞれをどう探していくのかと展開していく。

3.3 絵本で伝える図書館マナー

3.3.1 図書館は静かな場所

図書館マナーとは、図書館を利用する際の望ましい振る舞い方、行動である。図書館での過ごし方で、多くの描写があるのは「静かにすること」である。(A)(B)両タイプともに、図書館は静かにする場所という前提である。例えばHomerという猫が、静かに落ち着ける場所を探し歩き、ついに探し当てた静寂の場所こそが図書館であった、というエピソードがある[11]。そもそも「図書館は静かな場所」ということが前提であることがわかる。

本文に文章表現がなくとも、絵の中の言葉で「SHHHH」という表現や人差し指を口の前で立てるなどの描写がある。主人公のステレオタイプの司書のイメージを通して、「司書といえば、つりメガネで、いつも人差し指を口の前になたてているおばさん」[16]という表現で「静かにするところ」を伝えている。一方で、時と場所によっては、「静かに」というマナーが強制されないことも伝えている。音をだしてもいい場所[86]、おしゃべりして、自由なスタイルで利用可能な場所があること[35]、緊急時には大声で人を呼んでもいい[17]と伝えるものがある。

音を出す、騒音を出すということに関しては多様な比喩が用いられる。子ども自身の行為へ直

接注意をあたえるのではなく、例えば“ドラゴンを連れてきてはいけません”[4]であるとか、“You can do anything at the library”というポスター見たら、それは“それはサーカスをつれてきていいということではありません”[14]とあり、実際にサーカスをしたらどうなるかのエピソードを展開し図書館の混乱ぶりが描かれる。サーカスは心の中で、心の声でイマジネーションの世界でしましょう、ということである。また人間の図書館へ来た動物（ライオン）が、吠えたことで出入り禁止になり、あとで緊急時には声を出して良いエピソードにつながる。女の子が読書中に図書館に動物がやってくる空想に入り込み、その空想の動物に「静かにでていってください」と声をかけるが、実は現実の世界で声を出してしまうなどのエピソードがある[52]。クマが初めて図書館にやってきて、ネズミの紹介する本にことごとく文句をつけて、思わず声がおおきくなってしまい、「静かに」と声をかけられる[1]。クマが子どもか性別はどちらかもはっきりとは描かれていない。本から恐竜がとびだしてきて一混乱あり、また本の中に閉じ込めるお話で[26]は、恐竜が騒動の種になる。お話の中にはカエル、ドラゴン、クマ等が騒音の比喩として登場する。読者である子どもは「子ども（投影された自分）が注意される」という「指導」をうけるのではなく、お話を通じて「図書館は静かに利用する」ということを知ることができる。

また、図書館は、いつも静かにしていなければならない場所ではないことも表現される。女の子とふくろうが働く図書館には動物がやってくる。その図書館では楽譜も扱い、楽譜を探し出して演奏してみたら音が響いてしまう。他の利用者に迷惑になるためプレイルームを案内し、そこでは音を出して良いことを伝える[86]。同じく、歌が歌える児童室を描いているものもある[18]。字が読めないけれど読みたい動物はCDブックをヘッドホンで聞いて音声で本を楽しんでいる[66]。図書館は全く音のない世界ではないのである。

3.3.2 本の貸出のマナー

本の貸出についてのマナーは大きく2つの点から描かれる。一つは貸出の手続きおよび期間についてである。マナーを伝えることを意図して描かれたものの中に、よく知られた「小人の靴屋」^(注1)の小人（エルフ）がその後図書館で働いているという、「おしまい」の続きのお話で描かれているものがある。エルフの仕事を通じての図書館マナーを伝えるものである[36]。その中で「お気に入りの本はずっともっていられる？」という問いの答えとして、それは自分の本にはできないから、一定の期間を経たら返さなければならないことが示唆されている。同様に、図書館の仕事を通じて（図書館のシークレットサービスを装って）ミッションを遂行するという筋立てのお話では、彼らの仕事のガイダンスがいくつか示され、永久に借りられないこと、次の人のことを考えることというものが含まれている[25]。このエピソードで注目すべきは、図書館の本は自分のものにはならず、どうしても欲しい本は誰か（サンタクロース、両親、祖父母など）におねだりして買ってもらおう、と本の購入を呼びかけている点である。図書館の社会的な位置付けがこ

ういったことから垣間見える。潔く「お気に入りは買う」と、子どもの本に堂々と描かれる社会であれば「図書館は無料貸本屋」とはいわれたいのではないか。

貸し出した本を延滞しないようにということが、お話の面白さに活かされているものがある。夢中になってしまい返却を1日遅れたことで思い悩む姿を描くものや[74]、紛失してしまった(と思った)本を何がなんでも期日に返そうと探し回り奔走する姿が、面白おかしく描かれるものなどがある[53]。他にも、初めて図書館を訪れて、本を初めて借りるシーンはよく描かれ、その都度貸出カードとともに返却日の日付を判で押したスリップやカードが登場する。どれも、返却期日を守ることは、単なる「事務用の決まりごと」ではなく、他者に迷惑をかけないこと、図書館の資料は共有するものであることが伝えられている。貸出カードを登録する際には、自分で名前や住所が言えることが必要な条件であることも、カウンターで「自分の名前や住所を答えた」[74]という描写で描かれている。

貸出に関するマナーの2つめは本の取扱いに関する事柄である。本の取扱いについては、図書館内での利用(閲覧)と共通する点も多くあるが、家に持ち帰ることで起こりうる本の危機から「守る」視点で描かれるマナーについて着目したい。具体的には本の汚損・破損の防止に関することである。

例えば絵本の読者は子どもであるが、家庭においては、さらにその弟妹が想定される。彼らは絵本読者よりさらに小さい子であるから、かじったり、ベトベトの手で触ったりするかもしれないと、幼い弟妹の手の届かないところに置いてね、というわけである。ペットも同様である。図書館を描くお話には動物が来る図書館があるが、現実の世界の図書館は盲導犬以外の動物は入ることができない。ペットがかじったりしないように注意を払うことを求めている[25][36]。

図書館と家の違いとしては、飲食の可否がある。飲食も汚損、破損の原因になるので、食べながら、飲みながら本を見ないでと言っている。その他に、特定の場面としてはケーキを作った手で触らないでとか、日焼けをさせないで(でも、日焼け止めクリームはぬっちゃダメ)など、面白おかしく絵が添えられている[25]。落書きについては、小さな子やゴーストが落書きするかもしれないよ、ゴーストは消えてもペンと落書きは消えないよ、とあくまで借主は落書きしないことが前提であり、なおかつ他者がするかもしれないということを示している。いずれも、あれもダメ、これもダメという禁止ではなく、なぜ、どういうことがいけないのかが「面白く」描かれているのがポイントである。

3.3.3 図書館での振る舞いと資料の取扱い

図書館をどのように利用するのかという点では、静寂を保つための示唆に比喩が用いられたのと同様に、大きすぎる動物やドラゴンや恐竜の姿を通して他人へ迷惑になる事柄を伝えている。例えば、連れてきた大きなドラゴンや象がお話会に参加すると席が占有され、皆が窮屈になって

しまうことが、ユーモラスに描かれる[4][13]。これは、大きな荷物を持ち込むことが他者の迷惑につながることの比喩であろう。また、ある作品では全体としては広々とした書架が見開きに描かれる場面があるが、棚と棚の間のドラゴンは無理やり体を押し込んで独り占めで利用している姿で描かれる。ここでは、ドラゴンで窮屈な書架を眺める子ども注目したい。文では触れていないが、絵の中にいる子どもは車椅子に乗っている。書棚と書棚の間隔には意味がある。図書館は公平に誰もが使える場所であるべきであること、迷惑にならないよう助け合って利用すべきことが、さりげなく示唆されているのである[4]。

館内利用における資料の扱いについては、図書館内外で共通の「資料を大切に使う」方法と、図書館内において他者の利用を阻害しないマナーの2点が多く取り上げられるポイントである。まず、資料自身の取扱として、ページを早く捲らない点が挙げられる[25]。それは雑な取扱いで本が痛むというだけでなく、音が騒々しくなることも示されている。また、ほとんどの絵本で、しおりを使うことを勧めている。決してページの角を折ってはダメ、もししおりがなければ、小さな紙切れを挟んでおきなさいと代案を示す点も共通している。他に本の破損・汚損については、貸出のマナーではベットや小さな子がかじるエピソードが示されているが、館内利用では、モンスターが本を食べるシーンが描かれる[35]。そこでは「本は食べものではなく、読むもの」という表現がなされる。図書館へ来る子どもは本をかじることはないかもしれないけれども、目的外利用をしないことの、あくまで比喩として「本をかじるな」と言っている。

館内閲覧では、本を取り出し本の場所へ戻すことになる。その際の戻し方への言及も多い。本を上下逆に入れない、背表紙が見えるように入れる、元の場所へ返す、などである[9][25][35]。元の場所へ返すためには、セルフマーカーの利用を促している。図書館で働くエルフにおいても、本を元に戻すことが彼の仕事のひとつとして描かれる。前述の *Goldie Socks and the Three Librarian* [9]では女の子が森で見つけた本でできた小屋の図書館で、お気に入りの一冊を見つけるまでに散らかした本の描写がある。熊の図書館員が戻ってきた時、床に転がしっぱなし、棚の上に置きっ放し、上下が反対、前後が反対といった状態を見つけて不審がり非難する。しかし、女の子が自分にぴったりの本を見つけ、お気に入りの場所で読んでいることを発見して仲良く一緒に本を読む。決して直接叱ったりはしない。

4 図書館リテラシーとマナーを伝えるための表現の工夫

収集した絵本の中に、お話ではないが、マザーグースのような様式で描かれたもの（韻を踏んだ繰り返し、言葉遊びのような言い回し、童謡のように節のついているもの）と、後述の *Cantata Learning* のように楽譜とCDを巻末に付しているものなどがあつた。それらは、多くの情報を盛り込まず、集中的に簡単なフレーズ、キーワードを繰り返し伝えている。それらの資料によれば、リズムがあるものを繰り返すと忘れない、身につきやすいということがあり、さらに口ずさむこ

とができれば、言葉として覚えられるという効果を期待できると述べている。

音楽はついていないが、ライムに乗せて言葉遊びのように検索技術を伝えるもの[34]では、非常に単純な表現と言葉数でありながら、図書館リテラシーとして画面表示されるリストを指しながら書誌情報を読み解いていく。そして目録の役割と内容を伝え、書架での探し方とシェルフマーカーを使うマナーを、図書目録の検索以外にも日常に必要なすべてのことを検索できると歌うような表現で伝えている。

特に楽譜とCDを付す Cantata Learning の *Songs and Books* シリーズは初期学習のスキル開発用のシリーズで、各巻がそれぞれ多くない語数と韻を踏んだ表現によって展開される。図書館には何があるのか[6]、基礎的なマナー[21]、DDCと著者名・タイトル検索[7]、情報機器の利用、オンラインツールの安全な利用[30]まで段階的にお話があり、それぞれは歌になっているため耳で聞き、一緒に歌うこともできる。ここにも「たのしみながら」図書館マナー、図書館リテラシーを身につける秘訣がありそうである。このシリーズについて、文字と絵だけでなく、音声を含む資料であるならば、デジタル資料としてタブレットで展開してもよいのではないかと考えられるが、多くはないページでありながら敢えてハードカバーの紙の本として出版されている。これは手で実物に触れて体験的に読むという効果を狙っているためであると考えられる。紙の本の効果を示すよい例として、図書館における紙の本とテクノロジーの対比を描いたお話がある[29]。タブレットはそれ1つでいろいろなコンテンツは展開できるが、どんなお話であっても見た目が同じである。しかし、本は大きさや厚さといった「物」としての見た目や触感が個々に違い、本のおいさが好き、という子どもの意見が描かれている。子どもの感覚として、「紙の絵本」が大切に考えられていることが分かる。

5 おわりに

佐藤も指摘しているが、確かに子ども（児童・生徒も含む）を対象とした図書館利用の指南本も数多く存在しているし、一般向けの図書館利用スキルを指南するものも多く出版されている（佐藤 2008）。多くの指南本があるからといっても、子どものころから課題解決と図書館を接続する文脈を持っていない場合、大人になって突然図書館を使い始めることがあるだろうか？日本の社会において現実には日常生活の課題解決の場としてどれほど図書館が認識されているのであろう？インターネットの発展がもたらした豊富な情報環境からの図書館不要論、タダで本を読める無料貸本屋（伊藤 1987）、受験勉強の席貸し（前川 1987）といった図書館の本質とは異なる側面から人々から図書館は認識されることが少なくない。

図書館には何があって、どのように利用できるのかを知る機会は、実は誰にもある。学校には図書館があり、教育プログラムの中に組み込まれているはずである。学校で「調べ学習」において図書館リテラシーを身につけることは重要である。しかし調べ学習の文脈で捉え続けるかぎり

において学校の勉強の一貫になってしまわないかと懸念する。教育の文脈でのみ伝える図書館リテラシーはどれほど日常生活で生かされるのであろう？学習や教育の中で設定された「課題」だけが、課題解決のシチュエーションではない。生活の技能としての「困ったときには図書館へ」という発想が、日常生活の自然なふるまいの中に溶け込んでいくことを期待するならば、その意味において、絵本は図書館リテラシー伝達メディアとしての価値は高いと考えられる。

図書館を描いている絵本について、数年継続して調査・収集しているが100点以上を確認しており、可能であれば随時入手し確認を行っている。今回は図書館利用に必要な図書館マナーと図書館リテラシーが具体的にどのように描かれているかを調査した。今回言及したもので対象年齢を確認できたものの多くは4歳から8歳を対象にしていた。そしてお話の主人公や登場人物の振る舞いには、図書館リテラシーとマナーが埋め込まれている。これらを利用すれば就学年齢前後の早い段階にふれる絵本で、お話の文脈を通して「楽しみながら」図書館を知ることができる。もちろん、意図的に図書館リテラシーやマナーを伝えるために描かれたものも多くあるが、「お話の絵本」として、ガイドブックや便覧とは一線を画している。それらは、読み手があからさまに「お勉強の本」と意識しない形で手に取ることができるであろう。また、楽しくお話会で聞くことができるであろう。また、図書館のイベントで、あるいはお母さんと一緒に図書館の歌を歌えるであろう。

注1 小人の靴屋 グリム童話 正直者の貧しい靴屋が舞台。夜中に小人があらわれこっそり見事な靴をつくる。ある夜、靴屋が工房をのぞいてみると、二人の小人が靴を作っていた。小人は裸だったので、靴屋は小人の服を作っておいて置く。するとその服をきて小人は出て行ってしまおうというお話。Shelf Elfは出て行った小人の一人が今は図書館で働いているという設定で語られている。

注2 無料貸本屋論争として、貸出しサービスについては多くの議論がある。最近では、大手出版社から新刊書の貸出し猶予をもとめる要請がなされたりしている。

文献リスト

- 伊藤昭, 1987. 誰のための図書館か--「無料貸本屋」論に惑わされないために. 図書館雑誌, 81(7), 375-378.
- 小田光宏編, 2010. 児童サービス論. 日本図書館協会. 246p.
- 草谷桂子, 2013. 絵本は語る. 子ども未来社. 141p.
- 佐藤毅彦, 2008. 図書館利用法指南本の系譜とその図書館館 その1:新書版図書館利用法指南本『図書館に訊け!』『図書館を使い倒す』のケースについて(図書館はどう見られてきたか 9). 甲南女子大学研究紀要:文学・文化編, 44, 1-13.
- 野末俊比古, 2003. 利用者教育:「情報リテラシー」との関わりを中心に. カレントアウェアネス, 278, 15-18.
- 野添篤毅, 2008. 映画「ロレンツォのオイル」(Lorenzo's Oil)のその後:患者家族と医学界の対立と協調. 医学図書館, 55(3), p.257-259.
- 前川恒雄, 1987. われらの図書館. ちくま書房. 248p.
- 村主千賀, 2016. 絵本に描かれる図書館. 東海学園大学研究紀要:人文科学研究編, 22, 91-106.

表 1. 図書館・図書館員が描かれる絵本

No	Title	Author	Illustrator	Translator	Year	Publisher
1	A library book for Bear	Becker, Bonny	Denton, kady MacDonald		2014	Candlewick Press
2	Bob the Alien Discovers the Dewey Decimal System	Donovan, Sandra	Haake, Martin		2010	Picture Window Books
3	Brother Hugo and The Bear (ユ-ゴ修道士と本を愛しすぎたクマ)	Beebe, Taty	Schindler, S.D	千葉茂樹	2014	Eerdmans Books for Young Readers
4	Do NOT Bring Your Dragon to the Library	Gassman, Julie	Elkerton, Andy		2016	Picture Window Books
5	Do You Know Dewey?	Cleary, Braian p.	Veriethoff, Jpan L		2013	Millebrook Press
6	Fiction or Nonfiction	Miller, Shannon M	Durst, Kathryn	(音楽) Arrow Emily	2018	Cantata Learnig
7	Find a Book	Miller, Shannon M	Durst, Kathryn	(音楽) Arrow Emily	2018	Cantata Learnig
8	Froggy Goes to the Library	London, Jonathan	Remkiewicz, Frank		2017	Puffin Books
9	Goldie Socks and the Three Librarian	Hopkins, Jackie Mims	Mandders, John		2007	UpstartBooks
10	Hands Around the Library	Rothe, Susan L / Abouraya, Karen Leggett	Roth, Susan L. .		2012	Dial books for Young Readers
11	Homer The Library Cat	Lidbergh, Reeve	Wilsdorf, Anne		2011	Candlewick Press
12	I know a Librarian who Cewed an Word	Knowlton Laurie Lazzaro	Leonard, Herb		2012	Pelican
13	I Took May Frog to the Library	Kimmel Eric A.	Sims, Blanche		1990	Puffin Books
14	If you Ever want to Bring a Circus to the Library, Don't	Rarsley, Elise			2017	Litte Brow and campany
15	Librarian on the Roof : A True Story	King, M.G	Gilpin, Stephen		2010	Albert Whitman & Company
16	Library Lil	Williams, Suzanne	Kellogg, Steven		1997	Puffin Books
17	Library Lion [としょかんライオン]	ミシェル・ヌードセン	ケビン・ホークス	福本友美子	2007	岩崎書店
18	Lola at the library	MacQuinn, Anнна	Beardshaw, Rpsalind		2006	Charlesbrige
19	Madeline Finn and the Library Dog	Papp, Lisa			2016	Peachtree Publishers
20	Manners in the Library (Way to be:Manners)	Finn, Carrie	Lensch, Chris		2007	Picture Window Books
21	Manners in the Library (Library Skills)	Miller, Shannon M	Durst, Kathryn	(音楽) Arrow Emily	2018	Cantata Learnig
22	Manners with a Library Book	Tourville, Amanda Doering	Lensch, Chris		2009	Picture Window Books
23	Miss Brooks Loves Books (and I Don't)	Borrner, Barbara	Emberley		2010	Alferd A Knopf
24	Miss Dorothy and Her Book Mobile	Houston, Gloria	Lamb, Condie		2011	Harper
25	Never Let a Ghost Borriw Your Library Book	Casale, Laren	Rebora, Cesilia		2012	UpstartBooks
26	No T-Rex in the Library	Buzzeo, Toni	Yoshikawa, Sacihko		2010	Margaret K. McElderry Books
27	Our Librarian won't Tell us Anything!	Buzzeo, Toni	Yoshikawa, Sacihko		2006	UPstartBooks
28	Penelope Popper: Book Doctor	Buzzeo, Toni	Christy, Jana		2011	UpstartBooks
29	Return of the Library Dragon	Deddy, Carmen A	White, Michael P.		2012	Peachtree Publishers
30	Staying Safe Online	Miller, Shannon M	Durst, Kathryn	(音楽) Arrow Emily	2018	Cantata Learnig
31	The Best Book to Read	Bertram, Debbie; Bloom, Suzan	Garlan, Michael		2008	Dragonfly Books
32	The Boy who was Raised by Librarian	Morris, carla	Sneed, Brad		2007	Peachtree Publishers
33	The Library	Stewart, Sarah	Amall, David		1995	Square Fish
34	The Library Doors	Buzzeo, Toni	Westcott, Nadine Bernard		2008	UpstartBooks
35	The Not So Quiet Library	Ohara, Aachariah			2016	Dial Books for Young Readers
36	The Shelf Elf	Hopkins, Jackie Mims	Thornburgh, Rebecca		2004	UpstartBooks
37	あこがれうちゅうひこうし	ミケラ・マンティン	ジョー・イワーズ	しばたよういち	1994	フレーベル館
38	アンディとライオン	ジェイムズ・ドーハティ	ジェイムズ・ドーハティ	村岡花子	1961	福音館書院
39	うみのどうぶつとしょかんせん	菊池俊	こばようこ		2012	教育画劇
40	おさるのジョージとしょかんのおしごと	マーゲレット・レイ/ハンスアグスト・レイ		北山めぐみ	2013	金の星社
41	おさるのジョージとしょかんへいく	マーゲレット・レイ/ハンスアグスト・レイ		福本友美子	2006	岩波書店
42	おばけのマールとみんなのとしょかん	けーたろう	なかいれい		2015	中西出版
43	カエサルくんと本のおはなし	いけがみしゅんいち	せきぐちよしみ		2015	福音館書院
44	風をつかまえたウィリアム	ウィリアム・ギムクラン/ブライアン・ミラー	エリザベス・ズーノン	さくまゆみこ	2012	さ・え・ら書房
45	カモシカとしょかん	魚背ゆう子	水上悦子		2009	桂書房
46	きんぎょ	ユ・テウン		木坂涼	2009	らんか社
47	コウモリとしょかんへいく	ブライアン・リース		さいごうようこ	2011	徳間書店
48	こないかならばのとしょかん	モニカ・ブラウン	ジョン・パツラ	斉藤規	2012	新日本出版
49	ごほん!ごほん!ごほん!	デボラ・プラス	ティファニー・ピーク	おがわひとみ	2005	評論社
50	さみしかった本	ケイト・バンハイマー	クリス・シーバン	福本友美子	2013	岩崎書店
51	3万冊の本を救ったアリーヤさんの大作戦	マーク・アラン・スタグマティ		徳永里砂	2012	国書刊行会
52	しずかに ここはどうぶつとしょかんです	ドン・フリーマン		なかがわちひろ	2008	BL 出版
53	ステラのえほんさがし	エルンスト, リサ, キャンベル		藤原宏之	2006	童心社
54	大草原のとしょかんバス	岸田純一	梅田俊作		1996	岩崎書店
55	翼の時間	東逸子	東逸子		1995	ミキハウスの絵本
56	ティモシーとサラ ちいさな としょかん	芭蕉みどり			2015	ポプラ社

57	図書館だいすきーメキシコ	デルマタ・アビレス	デルマタ・アビレス	清水透	1996	蝸牛社
58	としょかんたんでいゆめきちくん	J-B・バロニアン	L.L. アファノ	佐藤見果夢	1999	評論社
59	図書館に児童室ができた日:アン・キャロル・ムーアの物語	ジャン・ピンボロー	デビー・アトウエル	張替恵子	2013	徳間書店
60	としょかんねこデューイ	ヴィッキー・マロン/フレッド・ウイター	ステイヴ・ジェイムズ	三木卓	2012	文化出版局
61	としょかんねずみ 1	ダニエル・カーク		わたなべてつた	2012	瑞雲舎
62	としょかんねずみ 2	ダニエル・カーク		わたなべてつた	2012	瑞雲舎
63	としょかんねずみ 3	ダニエル・カーク		わたなべてつた	2013	瑞雲舎
64	としょかんねずみ 4	ダニエル・カーク		わたなべてつた	2014	瑞雲舎
65	としょかんねずみ 5	ダニエル・カーク		わたなべてつた		瑞雲舎
66	としょかんのよる	ローレンツ・パウリ	カトリーン・シェラー	若松宣子	2013	ほるぶ社
67	としょかんへいくピープちゃん	クレシッダ・コウエル		佐藤見果夢	1999	評論社
68	としょかんへいこう	斉藤洋	田中六大		2015	講談社
69	図書館ラクダがやってくる	マーグリート・ルアーズ		斉藤規	2010	さ・え・ら書房
70	トマスと図書館おのおねえさん	バット・モラー	ラウル・コーン	藤原宏之	2010	さ・え・ら書房
71	トリケラととしょかん	五十嵐美和子			2013	白泉社
72	バスラの図書館員:イラクで本当にあった話	ジャネット・ウインター		長田弘	2006	晶文社
73	はちうえはほくにまかせて	ジーン・ジオン	マゴレット・プロイ・グレアム	もりひさし	1987	ペンギン社
74	ピバリーととしょかんへいく	アレクサンドラ・スタッドラー	アレクサンドラ・スタッドラー	まへざわあきえ	2003	文化出版局
75	ページマスター リチャードの図書館大冒険	デイク・グレッグ	デイク・グレッグ	唐沢剛幸	1995	フレーベル館
76	ほくが一番望むこと	マリイ・プラトリー	クリス・K・スーンビート	斉藤規	2010	新日本出版
77	ほくの図書館カード	ウィリアム・ミラー	グレゴリー・クリスティ	斉藤規	2010	新日本出版
78	ほくのブック・ウーマン	ヘザー・ヘンソン	デイビッド・スモール	藤原宏之	2010	さ・え・ら書房
79	ポチポチのとしょかん	川井ゆり子			2003	文溪堂
80	本、だーいすき!	ジュディ・シエラ	マーク・ブラウン	山本敏子	2013	新日本出版
81	ほんをひらいて	トニ・モリス/スライド・モリス	シャドラ・ストリックランド	さくまゆみこ	2014	ほるぶ社
82	ママのとしょかん	キャリ・ベスト	ニッキ・ディリー	藤原宏之	2011	新日本出版
83	みさきめぐりととしょかんバス	松永伊知子	梅田俊作		1996	岩崎書店
84	道はみんなのもの	クルーサ	モニカ・ベルト		2013	さ・え・ら書房
85	山のととしょかん	肥田美代子	小泉のみ子		2010	文研出版
86	よるのととしょかん	カズノコハラ		石津ちひろ	2013	光村教育図書
87	よるのととしょかんだいほうけん	中村李衣	北村裕花		2015	BL 出版
88	ろばのととしょかん	ジャネット・ウインター	ジャネット・ウインター	福本友美子	2011	集英社
89	わたしのとくべつな場所	パトリシア・マキサク	ジェリー・ピンクニー	藤原宏之	2010	新日本出版
90	調べるためのアイデアガイド (情報名人になろう 1)	堀田龍也 (編)	安土じょう		2001	汐文社
91	パソコンなどを使って調べよう (情報名人になろう 2)	堀田龍也 (編)	安土じょう		2001	汐文社
92	集めた情報をまとめよう (情報名人になろう 3)	堀田龍也 (編)	安土じょう		2001	汐文社
93	ホームページなどで発表しよう (情報名人になろう 4)	堀田龍也 (編)	安土じょう		2001	汐文社
94	図書館の達人!本の探し方がわかる事典:調べるのがおもしろくなる	金中利和	写真:国際ことも図書館		2007	PHP
95	図書館へいこう:図書館クイズ1 知識と情報の宝庫=図書館活用術	五十嵐絹子 (編)			2007	国土社
96	図書館へいこう:図書館クイズ2 魅力的な図書館委員会の活動=図書館行事のアイデア集	五十嵐絹子 (編)			2011	国土社
97	図書館ってどんなところなの (図書館へいこう1)	赤木かん子	すがわらけいこ		2007	ポプラ社
98	図書館のひみつ	高田高史	写真と絵		2016	PHP 研究所
99	本と図書館の歴史	モーリー・サワ	ビル・スレイヴィン	宮木陽子/小谷正子	2010	西村書店
100	本のれきし 5000年	辻村益朗			1989	福音館書院
101	ほんはどうやって探したらいいの (図書館へいこう2)	赤木かん子	すがわらけいこ		2007	ほぶら社
102	図書館のはじまり・うつりかわり (図書館のすべてがわかる本 1)	秋田喜代美	写真と絵		2012	岩崎書店
103	図書館の役割を考えてみよう (図書館のすべてがわかる本 2)	秋田喜代美	写真と絵		2012	岩崎書店
104	日本と世界の図書館を見てみよう (図書館のすべてがわかる本 3)	秋田喜代美	写真と絵		2013	岩崎書店
105	図書館をもっと活用しよう (図書館のすべてがわかる本 4)	秋田喜代美	写真と絵		2013	岩崎書店
106	本のせかいへ (わくわく図書館 1)	笠原良朗	太田大八		2010	アリス館
107	図書館ってどんなところ (わくわく図書館 2)	紺野順子	こばようこ		2010	アリス館
108	図書館で調べよう (わくわく図書館 3)	紺野順子	こばようこ		2010	アリス館
109	夢の図書館 (わくわく図書館 4)	笠原良郎	いとうみき		2010	アリス館
110	図書館ってすごいな (わくわく図書館 5)	笠原良郎・紺野順子	写真と絵		2010	アリス館
111	ほんで調べてぼうこくしよう	赤木かん子	mittiy		2011	ポプラ社

注 リストはno.89までタイトル昇順、90~111までは絵本形式のテキストとワークブック、便覧とみなされるもの記入した。